【東京都江戸東京博物館】

令和5年度目標達成シート

資料３－１

基本方針

「指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等、着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し「江戸東京の歴史と文化」の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」（Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館）を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2)東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として捉え積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 両国・深川地域の文化施設、区、関連機関等との連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	R2年度 実績値	R3年度 実績値	R4年度 実績値	R5年度 基準値	R5年度 目標値	R5年度 実績値
観覧者数（人）	376,009	420,254				
自主事業等参加者数（人）	25,541	37,324	97,174			28,085
デジタルアーカイブス（公開資料画像数）	51,745	15,783	11,210			96,133
ホームページアクセス件数	5,069,646	6,077,768	1,469,111			1,928,785

※R7年度中（予定）まで大規模改修工事のため休館

令和5年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和5年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1		資料：歴史と文化の〈継承〉 ●「江戸東京の歴史と文化」を国内外に発信できる資料の収集を行うとともに、「江戸博コレクション」を適切に管理保管する。 ●収蔵資料の全件公開に向けて、デジタルアーカイブスを充実させるため、資料データの整備を促進する。 ●大規模改修工事に伴い外部倉庫への資料移送を着実に実施し、外部倉庫において資料を適切に保管する。	●学芸員の地道な調査活動により、希少価値の高い資料を収集でき、コレクションの価値を高める活動が継続できた。また、外部倉庫に収蔵する資料の保存管理業務を安定して遂行した。 ●9万6,133点の資料を新規Web公開し、次年度の公開に備え、およそ9万9,000点の資料情報を確認、5万4,057カットの写真撮影を行い公開に備えた。全点公開に向けさらなる体制整備が必要である。
	評価指標	デジタルアーカイブスでの公開画像点数	公開画像点数　96,133,点
2		展示 ： 歴史と文化の〈発信〉 ●大規模改修工事に伴い常設展示室の改修工事及び展示準備を行い、 リニューアル・オープン後も 「江戸博コレクション」 を最大限に活用できる展示計画を準備する。 ●休館中もたてもの園や他の博物館において、 質の高い展覧会を開催するための準備を行う。 ●リニューアル・オープン後の魅力的な展覧会の計画を準備する。	●常設展示の改修後の魅力向上を意識した展示準備を行った。 ●日比谷図書文化館および東京都美術館にて展覧会を実施。広報や関連事業を通じ、事業運営のノウハウを得ることができた。 ●職員からの展覧会企画募集を継続し、4本の候補案を選定した。
	評価指標	常設展示及び展覧会計画の準備	常設展示改修後計画の改定、令和8年度企画展・令和9年度特別展の候補案策定
3		教育：歴史と文化の〈学舎〉 ●博物館へのアクセスが難しい対象に向けて、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業として移動博物館を実施する。 ●リニューアル・オープン後の教育普及事業、ボランティア制度の計画を策定する。	●移動博物館事業として、出張展示13回、ワークショップ23回を実施。島しょ部の2件、特別支援校の8件を含む実施を通じ、需要の把握や知見の獲得を継続した。また、「ハイパー江戸博」の明治銀座編を公開し、教育関係者への働きかけを強化した。 ●移動博物館で「学生サポートスタッフ」を施行導入し、教育普及関係事業の計画に反映させた。
	評価指標	教育普及事業の満足度	移動博物館事業の満足度：100%（満足：87%　概ね満足：13%）
4		運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●お客様の安心・安全を第一として、ショップやレストランをはじめあらゆるミュージアムシーンにおいて、おもてなしと感動を与え続ける博物館であるために、リニューアルオープンに向けた準備を着実に進めていく。 ●オンラインの更なる活用をはじめ綿密な広報戦略を展開するとともに、リニューアルオープンに向けた「江戸博ブランディング」の手法を見直しつつ、休館中においても江戸博の魅力を国内外に広く発信する。	●リニューアルオープンに向けて、お客様が安心・安全に利用できるよう、運営ノウハウを生かして東京都の工事との調整を行うとともに、当館が設置する施設・設備の整備の準備を行った。 ●動画による新規収蔵資料の紹介や季節・年中行事に合わせた収蔵品の紹介など効果的・計画的にSNSで情報発信し、休館中の館の事業等を幅広く発信した。また、デジタル媒体での使用に適したロゴへの改良を行った。
	評価指標	リニューアルオープンに向けた施設運営計画の準備	リニューアルオープンのために必要な施設・設備、サービスについて、整備スケジュールをたてるとともに、プロジェクトチーム（PT）を設置するなど課題検討の体制をつくり、運用を念頭においた具体的な内容を調査、検討した。
5		研究：歴史と文化の〈究明〉 ●大規模改修工事中のリニューアル準備室内に開室する仮設図書室において、事前予約制による閲覧サービスならびにレファレンスサービスを実施し、都民サービスの継続を図る。 ●江戸東京の歴史と文化に関する調査研究（外部機関との連携を含む）の成果を紀要、資料叢書などの刊行物、「えどはくカルチャー」の実施をとおして広く都民に還元する。	●外部倉庫に移送した図書資料を適切に管理するとともに、リニューアル準備室内の仮設図書室において、事前予約制による閲覧サービスならびにレファレンスサービスを実施した。 ●館員の研究活動の成果を『紀要』『史料叢書』や「えどはくカルチャー」などに反映させるとともに、館外の研究者と連携して調査研究を行い、特別協力として他館の展覧会に参画。江戸東京に関する研究センターとしての学術的役割を果たした。
	評価指標	仮設図書室における閲覧・レファレンスサービスの継続、刊行物の出版、カルチャー満足度	仮設図書室における閲覧・レファレンスサービスの実施。『紀要』『史料叢書』の刊行。 「えどはくカルチャー」の満足度94%
6		交流：歴史と文化の〈展開〉 ●都民はもとより世界各地の人びとの注目を集めるべく、江戸東京博物館が持つ豊富な情報を広く深く発信する。 ●江戸東京博物館を、両国→墨田→東京→日本の文化発信の拠点としてさらに定着させる。 ●アジアや欧米の主要都市の博物館・美術館との交流を、さまざまな事業をとおして促進する。	●日中韓3カ国4館の国際シンポジウムが瀋陽故宮博物院で「博物館と都市のより良い生活」をテーマとして12月5日に開催され、各館代表の2名が発表を行った。 ●ニューヨーク市立博物館を会場として開催された都市博物館のコレクション・活動国際委員会（CAMOC）の年次会議に参加し、10月18日に発表を行った。 ●当館ならびに国立歴史民俗博物館が事務局館を務める「全国歴史民俗系博物館協議会」（歴民協）の総会を7月に沖縄で開催した。川崎市市民文化局からの依頼により、川崎市市民ミュージアム被災収蔵品レスキュー支援の呼びかけを歴民協事務局から加盟館に行うとともに、連絡調整を行った。
	評価指標	国際的なプレゼンスの向上（海外の研究者や研究機関との研究交流件数）	海外の14研究機関と研究成果物である『紀要』等の相互交換を行い、研究情報収集と発信を行った。機関リポジトリを活用して『紀要』等を公開、発信し、国内外からのアクセスを可能とした。
	評価指標		
	評価指標		

総合的な所見（自己評価の総評）

長期休館の2年目を迎え、本格化した東京都の大規模改修工事との調整や、博物館運営のために必要な施設・設備等の再整備の準備を行った。一方で、日比谷図書文化館及び東京都美術館で展覧会を開催したほか、昨年度から始めた「移動博物館」は大島や特別支援学校などの来館が難しい方たちへの展開、収蔵資料のデジタルアーカイブスやスマホアプリ「ハイパー江戸博」の開発継続など、デジタルコンテンツも充実させて、休館中もさまざまな場所、媒体で楽しんでいただけるよう、事業を継続した。財団施設等での「えどはくカルチャー」の開催、瀋陽故宮博物院で開催された国際シンポジウムやニューヨーク市立博物館で開催されたCAMOC年次会議での発表、紀要等の刊行により調査研究の成果を発表した。また、島しょ地域や多摩地域を含む都内会場での伝統芸能公演などの館外事業や、「江戸博ニュース」、SNSの活用などにより、休館中においても江戸博の活動を発信しプレゼンスを維持した。
本館施設を利用できないという特殊な環境の中、職員全員がリニューアルオープン後はこれまで以上の多くのお客様に来場いただきたいという気持ちを持って、創意工夫しながら、再開館準備と事業の両面の業務に取り組んできた。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

・リニューアルオープンに向かう煩雑な業務状況において、着実な事業の遂行と、精一杯出来ることを模索して新たなチャレンジを両立させ成果を挙げていることは、財団との連携によるガバナンスの確保とともに、館長以下現場のマネジメントと、何よりそれぞれの職員の役割を理解したオペレーションが、しっかりと機能している証である。
・休館中においても、外部倉庫での収蔵資料の保管・保存環境の維持、資料収集、調査研究、情報発信等、博物館の基幹機能の継続・充実が図られていることは高く評価できる。
・休館中の情報発信活動として、都・区の文化施設との連携による展覧会や、施設への来館が難しい利用者を対象とする「移動博物館」の取り組みなどは、それぞれ異なる方法による展覧会運営であり、今後再開後にも参照しうる重要な取組として、館の活動を広げる可能性を開いた。こうした事業に積極的に取り組み、成果を挙げていることも高く評価できる。
・収蔵資料のデジタルアーカイブス化やスマホアプリ「ハイパー江戸博」の開発と情報発信は、江戸博自体はもとより、江戸・東京の歴史文化に対する社会的関心を高め、興味を深める取組として評価できる。
・財団施設等での「えどはくカルチャー」の開催や瀋陽故宮博物館で開催の国際シンポジウムでの発表、紀要等の刊行による調査研究の報告は、学芸員の研究意識が高いことを示しており、評価できる。
・これら休館中の事業の実施や運営は、再開館後の江戸東京博物館においてどのような形で継続、あるいは変更していくのかは大きな課題であるが、利用者の立場・目線を忘れることなく、その成果を、リニューアルオープン後に生かすとともに、新しい展示の見方や、楽しみかたなどを提案して欲しい。
・職員全員が博物館の再開に向けて全力で取り組んでいる様子が伺われる。これにより蓄積したものを江戸博のスキル・ノウハウとして活かし、日本の中核的都市博物館として、更なる充実を期待したい。

【江戸東京たてもの園】

令和5年度目標達成シート

資料３－２

基本方針

「指定管理提案書」に掲げた「6つの事業」に基づき、江戸東京博物館および江戸東京たてもの園の基本方針を以下のとおりとする。

1. 資料：歴史と文化の〈継承〉
(1) 61万点の「江戸博コレクション」を都民のかけがえのない文化遺産として、未来の都民へと継承すべく大切に保管する。
(2) 東京2020大会に関わる資料を積極的に収集し、その「レガシー」としてアーカイブ化を促進する。
(3)大規模改修について、収蔵品の計画的な搬出等着実に準備を進める。

2. 展示：歴史と文化の〈発信〉
(1) 常設展示を中心として、豊富な実物資料や精巧な複製・模型を活用し、またICT技術を駆使した多面的な展示解説などによって様々な層に対し、江戸東京の歴史と文化の多彩な魅力を発信する。
(2) 特別展は、江戸東京という都市史を主題とした当館の固有性に基づき、質が高く魅力にあふれ、オリジナリティあふれる企画を開催する。

3. 教育：歴史と文化の〈学舎〉
これまでの教育普及事業を発展させていくとともに、子供・高齢者・外国人・障害者と対象を絞り、「少子高齢化」や「成熟社会」の到来など、時代の要請に応じた新たな教育普及プログラムを開発のうえ実践する。

4. 運営：歴史と文化の〈拠点〉
「3S方針」（Safety:安全・安心、Service:おもてなし、Sense of Wonder:感動する博物館）を堅持する。とりわけ、災害やテロ対策をはじめとする「危機管理」については、最優先の課題として全館を挙げて取り組む。

5. 研究：歴史と文化の〈究明〉
江戸東京学の研究センターとして、「江戸東京の歴史と文化」をテーマとする調査研究を促進し、その成果を展示をはじめ、さまざまな事業に反映させ都民へ還元する。

6. 交流：歴史と文化の〈展開〉
(1) 北京首都博物館・ソウル歴史博物館・瀋陽故宮博物館と、国際シンポジウム、学芸員の相互派遣、交流展等の国際交流を引き続き促進する。
(2)東京都の姉妹友好都市をはじめ、世界の主要都市に所在する博物館において交流展を開催する等、更なる交流を推進する。
また、国際博物館会議を国際交流促進の場として積極的に活用し、江戸東京博物館のプレゼンスを向上させていく。
(3) 多摩地域の文化施設、関連機関などとの連携を強化し、地域の活性化や各施設の回遊性を高める取り組みを行う。

	R2年度実績値	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度基準値	R5年度目標値	R5年度実績値
観覧者数（人）	100,771	116,052	214083	〈250,000〉	200,000	230,978
自主事業等の参加者数（人）	0	0	6346		3,000	17,729
HPアクセス件数	5,445,045	7,280,091	7,870,777			9,405,452
情景再現事業の入園者数・参加	18,945	6,529	39,431			39,167
昔くらし体験参加者数（人）	645	505	2,212			2,283

※R5年度基準値は、提案書の基準値
※R5年度目標値は、当該年度特有の事情を考慮した数値

令和5年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

	令和5年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1	資料：歴史と文化の〈継承〉 ●30棟の復元建造物に対し、長期修繕計画に則り修繕を実施する。また、緊急修繕工事や日常の軽微な補修等を確実に遂行し、来園者の安全確保と文化財の保存管理を図る。 ●旧武蔵野郷土館所蔵資料に関し、適切な保存管理を継続する。 ●虫菌害、獣害などから復元建造物や収蔵資料を保護するための対策を行う。	●大規模な工事となった旧光華殿の修繕工事を長期修繕計画に則り予定通り完了した。緊急対応として20件の工事を迅速に完了させた。 ●開園後30年が経過して頻発する施設内の不具合に対して、関係各所と調整しながら全ての修繕工事を完了させ、収蔵資料の保全・活用、園内の安全管理に資することができた。 ●総合的有害生物管理の手法に則り、引き続き適切な資料管理を実施した。
	評価指標　長期修繕計画に基づく修繕の実施状況	来園者の主動線となっている旧光華殿の修繕を開園しながら事故なく予定どおり完了させた。
2	展示 ： 歴史と文化の 〈 発信〉 ●復元建造物の展示では、季節感の演出など体感性の向上に努める。また、ホームページ等を活用した情報発信を推進する。 ●休館中の本館に代わり、江戸東京の歴史と文化の発信と継承に資する特別展示を開催する。 ●情景再現事業は、新型コロナウィルスの感染状況を勘案しながら、建造物の構造や機能を体感できるような内容で実施する。	●復元建造物内では季節感のある展示を行い、ホームページやSNS等を活用し積極的に情報を発信した。また古くなった演示品やパネルを新規作成し、展示の品質向上に努めた。 ●「江戸東京のまちづくり」「江戸東京のくらしと乗り物」というふたつの「江戸東京博物館コレクション展」を開催し、休館中の江戸東京博物館に代わって江戸東京の歴史と文化の魅力を発信した。 ●情景再現事業では、新型コロナウィルス感染防止に留意しながら、体験・体感を重視したプログラムを実施し好評を得た。
	評価指標　令和5年度観覧者数	230,978人（達成率115%、対前年度比108%）
3	教育普及：歴史と文化の〈学舎〉 ●園の代表的な教育普及事業である「昔くらし体験」を確実に遂行すると共に、これを外国人、障害者、家族・小グループ等の来園者属性に合わせアレンジした事業の定着を図る。そのための環境整備を検討する。 ●ホームページ上に様々な学齢に応じた学習プログラムを掲載、オンライン事業を展開する。 ●社会課題の解決に貢献するための事業に園の特性を活かしながら取り組む。	●「昔くらし体験」を着実に実施したが、これを様々な来園者に拡大する事は今後の課題。 ●「えどまる広場」の充実をはかるとともに、AR技術を備えた「たてもの園鑑賞ナビ」を開発して、復元建造物の基本情報などをオンライン公開した。 ●点字による園内展示マップの提供、触察模型「前川邸」を活用したワークショップの実施など、誰もがたてもの園の情報にアクセスできるよう整備をすすめた。
	評価指標　教育普及事業の参加者数	昔くらし体験28校・2,283人（対前年度比102.7%） 情景再現事業・39,167人（対前年度比99.6%）
4	運営：歴史と文化の〈拠点〉 ●すべての事業において、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための必要な手段を確実に講じる。 ●「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」の安全確保を第一に、「危機管理」を最優先の課題として取り組む。 ●ショップやレストランをはじめ、あらゆるミュージアムシーンにおいて、来園者の心に残るような行き届いたサービスを提供する。	●新型コロナウィルスの感染法上の位置づけが「5類感染症」に変更された令和5年5月8日以降も、感染症拡大防止処置を確実に講じつつ、来園者サービスとの両立をはかった。 ●「危機管理」を最優先の課題に掲げ、「来園者」「園スタッフ」「博物館資料」のいずれも大きな事故なく安心安全の運営を実現した。
	評価指標　顧客満足度	総合満足度（「満足」と「どちらかといえば満足」の合計）は99.6%
5	研究：歴史と文化の〈究明〉 ●復元建造物の展示や解説を充実させるとともに、建築の専門博物館にふさわしい展覧会などを開催する。 ●旧武蔵野郷土館資料を中心に、多摩地域の文化資源の調査研究を進める。 ●博物館事業のデジタル化に係る調査研究を進める。	●復元建造物の演示品を刷新する一方、建築の専門博物館としての魅力を向上させる特別展を開催することができた。 ●次年度開催予定の「武蔵野の歴史と民俗」展の基礎調査を進めた。 ●今年度開発した「たてもの園鑑賞ナビ」に掲載する資料情報を精査する活動をとおして、復元建造物に付随する基礎情報を整備した。
	評価指標　研究成果の公開	特別展図録2種類刊行、『前川國男邸復元工事報告書』『たてもの園解説本』増刷
6	交流：歴史と文化の〈展開〉 ●小金井市をはじめとする関連諸団体と連携し、事業の実施及び広報の相互協力により、発信力の強化を図る。 ●多摩地域唯一の都立文化施設として、地域の博物館をはじめ広く内外の野外博物館と連携し、地域の活性化に寄与する。 ●コロナ禍の状況を鑑み、地域の連携、活性化に取り組む。	●小金井市官公署連絡協議会に参画し、同会会員の小金井市、市商工会、市観光街おこし協会、消防署・警察署、小金井公園サービスセンターなど、たてもの園の運営に必須の関連団体と積極的に交流をはかり、地域連携・活性化に寄与した。 ●東京都三多摩公立博物館協議会や全国文化財集落施設協議会での活動により、地域博物館、専門博物館として必要な役割を果たすことができた。
	評価指標　地域等との交流実績	小金井市民祭り・桜祭りに協力し、建築を専門とする博物館、多摩地域の博物館との交流を促進した。

総合的な所見（自己評価の総評）

開園30周年を迎えた令和5年度のたてもの園は、大きな事故なく安心安全の運営のもと、予定していた事業を計画通り実施し、高い満足度と目標を上回る来園者数を達成することができた。加えて大規模な修繕工事となった旧光華殿の改修工事の実施により来園者サービスに資する整備が進んだこと、たてもの園の事業展開に不可欠なボランティア制度の改革に筋道をつけ、新しいボランティア制度を見据えて東京学芸大学との連携協定を締結したこと、また来園者の園内鑑賞をサポートするだけにとどまらず、復元建造物の詳細な情報などを来園者に提供する多目的ツールへと発展することが予定されている「たてもの園ナビ」を開発したこと、点字図書館との連携や園内点字マップの作成など社会共生に向けた取り組みが成果を出し始めたこと等は、今後のたてもの園の活動と来園者サービスの質的向上を期待しうる成果であった。今後は、経年劣化により頻発する様々な不具合については、必要に応じて東京都と十分に協議しながら適切に対応していくことが課題である。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

多様な事業を事故なく実施し、質の高い事業を実現できていることを賞賛したい。少人数による運営体制であっても、ベテラン学芸員の精鋭が集まっているから成し遂げられている点も高く評価したい。その技量や知識を若手に必ず継承してほしい。
また、「たてもの園ナビ」の多言語対応の可能性や、新ボランティア制度による活動など、これからの博物館活動に期待が膨らむ事業に今年度着手している点も高評価と言えよう。

【東京都写真美術館】

令和5年度目標達成シート

資料３－３

基本方針

東京都写真美術館は、日本で唯一の写真と映像を専門とする総合美術館として、写真・映像に関する文化の振興に寄与するため、平成7年1月に恵比寿ガーデンプレイスに開館致しました。
以降、当財団は、世界にも数少ない写真・映像の総合美術館の運営を担う団体として、「写真・映像とは何か」という根本的な問いに答える展覧会プログラムを組み立て、記録としての写真・映像や、芸術としての写真・映像、報道としての写真・映像など、写真・映像が持つ多様な性格や表現により、如何に人々に豊かさや潤いを与えていけるかを追求してまいりました。
今後も、写真と映像のセンター的役割を担う美術館として「存在感」を高めていくことを基本コンセプトに、ホスピタリティーの高い館運営を行ってまいります。
以下は、基本コンセプトを支える5つの美術館像と、当財団として取り組む重点目標であり、写真美術館はこれらを実現するため、質の高い展覧会はもとより、専門性に裏打ちされた多様な事業を展開することにより、東京の代表的文化施設の一つとして貢献し、その存在感を国内外に示してまいります。

〈基本コンセプト〉
我が国唯一の写真・映像の総合美術館として、センター的役割を担う「存在感のある美術館」を目指します。

〈5つの美術館像〉
① 質の高い写真・映像文化と出会う美術館
② 写真・映像文化の新たな創造を支援する美術館
③ 過去から現在に至る写真・映像文化を未来に継承する美術館
④ 写真・映像文化の拠点として貢献する美術館
⑤ 開かれた美術館

館の運営に当たっては、館の基本コンセプトである「存在感のある美術館」とこれを支える5つの美術館像を目指すとともに、財団総体で取り組む3つの重点目標を達成するため、以下の目標を設定し、毎年、進捗状況を管理しながら事業を進めてまいります。
とりわけ、写真・映像に係る技術の進展や、それに伴う社会生活や価値観の変化、新たな表現など、時代の動向を具に捉えながら事業展開に努めます。また、国内外に写真・映像の館の存在感を示すため、写真・映像を専門とする総合美術館としてこれまで培った専門性を発揮し、質を重視した展覧会を実施するとともに、保有する国内外の美術館や国際交流基金等のネットワークを活かした共同企画、SNS等の効果的な情報ツールを積極的に活用した戦略的広報を推進してまいります。

	R2年度実績値	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度基準値	R5年度目標値	R5年度実績値
観覧者数（人）	158,338	209,004	318,262	<380,000>	225,000	335,721
自主事業入場者数（人）	4,696	17,712	26,137		36,000	31,645
図書室利用者数（人）	1,966	10,268	20,739			23,698
支援会員法人数（法人）	230	222	221			211
HPアクセス件数	2,912,787	4,450,870	5,700,109			4,631,452
付帯事業収入（千円）	5,584	4,207	5,898			5,785

※R5年度基準値は、提案書の基準値
※R5年度目標値は、当該年度特有の事情を考慮した数値

令和5年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

	令和5年度達成目標		成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1	『質の高さに磨きをかけた展覧会の開催』 国際動向や社会との関連等を踏まえた専門的調査研究に基づき、収蔵コレクションの有効活用を図りながら、質が高く、あらゆる来館者に満足いただける展覧会を開催してまいります。		○コレクションの活用と自主企画展・誘致展を組み合わせながら、16本の展覧会を開催した。重点収集作家個展や旬のミドルキャリアの作家個展など、日頃の調査研究に基づく質の高い展覧会を開催した。 ○出品作家による解説や対談、展示風景紹介など展覧会と連動した様々なオンラインコンテンツを発信し、鑑賞機会の創出を行った。
	評価指標	展覧会満足度、関連事業の参加者数、展覧会評数	収蔵展・自主企画展　来館者満足度平均90.3%、関係事業の参加者数5,303人、展覧会評数83本
2	『将来性のある作家の発掘と創造活動の支援』 将来の活躍が期待できる写真・映像の新進作家に対する作品発表の提供により、登竜門や跳躍台の役割を果たすとともに、作品鑑賞による刺激体験を通じて、作家や鑑賞者の文化創造活動を促進してまいります。		○日本の新進作家展、恵比寿映像祭などを通じて、写真・映像表現における新進作家の作品を紹介し、関連事業への出講等により作家・作品と来館者を結ぶ取り組みにつとめ、写真美術館発のアーティストの発掘、作品の収集を行った。 ○恵比寿映像祭の「コミッション・プロジェクト」で令和6年度に制作委嘱する新進アーティストを選出した。
	評価指標	新進作家展、映像祭に登用した作家の活躍（受賞件数、個展の開催件数、作品集の制作件数など）、関連動画のアクセス数	○コミッション・プロジェクト特別賞で恵比寿映像祭2024特別展示の金仁淑氏が第48回木村伊兵衛賞受賞 ○「日本の新進作家展vol.20」出品の夢無子氏が2024年日本写真協会賞新人賞受賞 ○新進作家作品の収蔵（５作家６２点）
3	『写真・映像文化の礎となる収蔵コレクションの充実・発信』 貴重な作品を的確に収集・保存するとともに、展覧会を通じて、文化の担い手である子供や若者に届くよう、積極的に発信いたします。また、ICTなど最先端技術を積極的に活用し、当館コレクションに加え、江戸東京博物館、現代美術館のコレクションを併せた「東京都コレクション」を国内外に発信してまいります。		○収集方針、収集の新指針に基づき的確に作品を収集し、主催する展覧会等で早期の公開を図った。また、資料情報システムの充実を図り、収蔵品データの登録・公開につとめた ○令和5年度新規公開データ　テキストのみ411（R4実績624）件、画像7,258(R4実績7,052）件　公開点数36,285件（うち画像付きデータ26,360件：R4実績19,102件）
	評価指標	収蔵品の活用件数、デジタルアーカイブのアクセス件数	令和5年度　資料情報システムアクセス件数　訪問数65,551(R4実績39,433)件　閲覧履歴1,793,722(R3実績936,839）pv
4	『国内外の写真・映像に関する美術館等との連携』 蓄積した国内外のネットワークをより一層強固にしていくとともに、保有する収蔵コレクションや高い専門性を活用して、事業連携を促進するなど、国内の写真・映像文化の振興に貢献してまいります。「シビック・クリエイティブ・ベース東京」との連携を強化し、映像祭等でデジタルテクノロジーを活用した新たな芸術文化の鑑賞機会を提供してまいります。		○写真作品の共同研究を継続した。（神奈川県立近代美術館、三重県立美術館、板橋区立美術館、千葉市美術館他）。 ○恵比寿映像祭では、恵比寿ガーデンプレイスセンター広場でCCBTと連携した展示を行った。
	評価指標	国内外の文化施設や研究機関との共同企画や巡回展の実施件数、専門的会議への参画などの件数及び成果	○巡回展「宮崎学 イマドキの野生生物」高崎市美術館、「ロベール・ドアノーと本橋成一」田川市美術館 ○台湾の映像研究者、関係者を招いたシンポジウムを恵比寿映像祭期間中に開催
5	『障害者や子供など多様な来館者に対応した事業の推進』 障害者や子供、高齢者、さらには子育て世代 などにも対応した鑑賞の機会や参加体験型事業等を、地域のボランティアやNPO、教育機関等と連携しながら事業展開することにより、社会課題の解決に貢献するとともに、芸術文化の支え手の裾野を拡げてまいります。		一般団体「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」によるワークショップなどインクルーシブなプログラムや手話による展示解説動画の作成、目黒区と渋谷区の子ども食堂や社会福祉協議会、住民会議等と連携した子供の居場所づくり等を実施した。
	評価指標	ワークショップ実施件数、参加人数、参加者満足度、ボランティア活動参加人数 地域福祉事業（子供食堂、老人ホーム等）、NPO・教育機関等との連携件数	ワークショップ実施件数　34件、参加人数　270人、参加者満足度 98.4%、ボランティア活動参加人数　377人、地域福祉事業（子供食堂、老人ホーム等）、NPO・教育機関等との連携件数　５箇所１３件
6	『基幹的事業である展示事業等の観覧者数の向上』 展示事業は、作品収集・保存、調査研究、教育普及事業など、館の活動総体が収斂された美術館の基幹的事業であり、都民の期待が最も高い事業です。 また当館ならではの施設として美術館内の上映ホールを有しており、希少性が高く芸術的な名画の上映事業を実施しております。 基幹的事業であり主要施設を活用した、展示事業及び上映事業の年間観覧者数を数値目標とし、この達成に向けて取組を推進してまいります。		○新型コロナウィルス感染症の位置づけが5類感染症に移行したことに伴い、ギャラリートークや対面でのワークショップ等を再開し、上質な展覧会、上映、館内外での関連イベントを開催した。SNSを活用した広報等、多角的な展開が功を奏し、前年比105%となる33,721人の来場者数となった。
	評価指標	年間観覧者数	参考目標値：225,000人　実績：335,721人（149%） 【内訳】展覧会321,231人　上映事業等　14,490人

総合的な所見（自己評価の総評）

【質の高い展覧会事業の実施】 日頃の調査研究に立脚した重点収集作家の個展や多彩な切り口での質の高い展覧会を開催し、社会との関連性や国際動向をふまえた新進作家展を開催するなど現代社会を考察する場を創出した。「コミッション・プロジェクト」は映像祭の成果として海外発信の機会促進、ネットワーク作り、写真映像業界の発展に寄与した。
【社会包摂事業の拡充 】 障害の有無にかかわらず、あらゆる人々が参加できる多様なプログラムを実施した。手話ナビゲーターによる館内案内動画の作成など、より一層幅広い事業展開を行うとともに、恵比寿映像祭では子供から高齢者、障害のある方、外国ルーツの方等が楽しめる多様なサポートやプログラムを実施した。また、収蔵展、自主企画展に伴う「担当学芸員によるギャラリートーク」では手話通訳付きギャラリートークを継続実施した。
【安定的な運営】 社会情勢が要因となり企業の収益が悪化する中、支援会員制度を維持し着実に運営していくための各種取組みや、助成金、協賛金等の外部資金を積極的に獲得し、収支のバランスの取れた運営ができた。上記１～６の目標に対して満足できる成果を上げることが出来たと考えるが、今後さらに充実させていきたい。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

・全体として高い評価となった。
・展覧会は、集客に関して申し分ない成果を上げている。収蔵展は独自の切り口が光り、自主企画展は、20回目となった「日本の新進作家」展が作家の受賞機会となるなどその役割を果たし、恵比寿映像祭は新たな試みも見られ観客も多く可能性を感じさせるものだった。誘致展は外部との共催によりバリエーション豊富な展示が行われた。
・作品・資料の収集・管理は、実施方針に基づき適切かつ堅実に実施されている。
・作品資料情報システムはデータベースの充実に向けて地道な努力がされており、画像付きデータが7000件以上追加された。
・教育普及事業では、多彩なプログラムやティーチャーズウィークなど学校との連携に向けた新たな取組み、様々な人が学ぶ機会の創出など、写真文化を担う次世代の育成が行われ、誰もが安心してアートと出会える場づくりが推進されている。
・地域連携は、恵比寿映像祭だけでなく年間を通して地域のイベントに参加し、地元コミュニティに貢献した。

【東京都現代美術館】

令和5年度目標達成シート

資料３－４

基本方針

文化の創造と魅力あるメッセージの発信

①現代美術の国内外への発信

②現代美術の保存と継承　（コレクションの充実・保全・公開）

③広範な関心への応答

現代美術の普及と次世代の担い手を育む

④優れた作品等の鑑賞機会の提供

⑤現代美術の普及と子供達の育成

⑥新進・若手作家をはじめとする文化の担い手への支援

あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現

⑦　アクセシビリティの整備

⑧　地域連携の強化

	R2年度実績値	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度基準値	R5年度目標値	R5年度実績値
観覧者数（人）	437,375	437,908	463,723	〈430,000〉	430,000	664,845
自主事業参加者数(人)	48,257	33,407	28,307		40,000	54,663
若手作家の支援(人)	11	10	13			13
協賛金獲得金額(千円)	17,733	10,235	10,000			4,039
HPのアクセス件数	6,794,966	6,700,574	9,160,852			10,091,451

※R5年度基準値は、提案書の基準値
※R5年度目標値は、当該年度特有の事情を考慮した数値

令和5年度達成目標／成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

	令和5年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1	■総合美術館として、調査研究／展示／教育普及等、貴重な美術資料を様々な形で提供するとともに、魅力溢れる最先端の現代美術の表現を国内外へ広く発信する。 ■国内外の人々、特に次代の芸術文化の担い手である子供や青少年に、日本発の「現代」と「美術」の魅力をより積極的かつ効果的に発信する。 ■事業を通じて国内外のネットワークを拡大し、発信力の強化に取り組む。	■現代美術の幅広い表現を展覧会、教育普及、関連事業等を通じて国内外へ発信できた。 ■話題性に富む大型のファッション展、調査研究に基づく海外作家個展、分野や領域を拡大する展覧会などバランスよく実施し、基準値を大きく上回る観覧者数を獲得し館の魅力をアピールした。 ■事業や調査研究を通じ、国際的な組織、作家、関係者等のネットワークを推進した。 ■オルデンボルフ展（4年度開催）を対象に、当館学芸員が第18回西洋美術振興財団賞を受賞。
	評価指標　年間観覧者数	年間観覧者数664,845人（コレクション展160,243人、企画展504,602人）
2	■収蔵作品・資料等の充実・活用を通じ、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、新たな視点で日本の美術のコンテクスト形成を目指す。 ■専門家との協働や最新の調査研究の成果に基づいた着実な管理（保存・修復・展示）によって、貴重な作品を未来へ伝える。 ■コレクションの活用、他美術館・博物館への貸出協力を行うとともに、海外での東京都コレクション展の開催など財団他施設との連携で展開する。	■フロア毎にテーマを変えたり、新規収蔵作品を積極的に公開するなど、さまざまな切り口と工夫で、コレクションの魅力を発信するような展示を開催した。 ■専門家と協働しながら35点の修復を進めることができた。 ■国内外の美術館等へ31件・131点の作品貸出を実施した。 ■コレクション検索サイトを活用し、画像とともに展示中や貸出中の作品情報を発信した。
	評価指標　コレクション（収蔵品）のデジタル撮影点数、 新収蔵作品のデジタルデータの入力件数	収蔵作品のデジタル撮影　2,162カット／新収蔵作品のデジタル入力　113件
3	■現代社会の広範な関心に対応し、東京の社会課題に美術をとおして向き合う場となることを目指す。 ■最先端の情報の収集と堅実な調査・研究に基づいたプログラムの提供により、来館者に「知る喜び」を伝える。 ■デザイン、ファッション、建築、音楽、映像、アニメーションなど、他ジャンルを幅広く取り上げることで多様な関心に応える。 ■上記事業全体をとおして、財団内連携によるクリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーに参画する。	■「あ、共感とかじゃなくて。」展「豊嶋康子」展など、最新の分野を含む若手作家のグループ展、社会課題やアクセシビリティへの取り組みを行った企画展、中堅作家の再評価につながる調査に基づく個展など、多様な切り口の現代の表現を享受する場を創出できた。 ■MOTアニュアル展「シナジー、創造と生成の間」では豊富な資料を空間構成やデジタル技術等により魅力的に展示し、創造の持つ力を伝えた。
	評価指標　クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー事業の件数、参加者数	社会的課題に取り組んだ作家5名／来場者57,010名／哲学対話、ギャラリートーク他　関連プログラム12本参加者470名
4	■先端的表現/展示手法により国内外の現代美術を紹介し、ファッション、映像等、様々なジャンルを幅広く取り上げることで新たな客層を獲得する。 ■収蔵作品、資料等の充実・活用を通じて、「現代」と体系的な美術の歴史とを結びながら、優れた鑑賞機会を提供する。	■展覧会ごとに異なる共催や協賛・協力の仕組みを持ちながら、各関係機関・関係者、作家との細部にわたる確認を繰り返しながら課題をクリアし、安全無事に実施できた。 ■注目度、満足度が高い展覧会の実施により、企画展全体としては、過去2番目の動員を獲得し、定性評価も一般来館者、専門分野双方から企画・展示内容への理解を得られ、高い評価となった。 ■約5,800点の収蔵作品を中心に3期にわたり多様なテーマのコレクション展を開催した。
	評価指標　コレクション展示の出品・公開点数	コレクション展における収蔵作品公開　479点
5	■収蔵作家が現存する特性を活かした活動、体験型展示との連動など子供でも分かりやすい方法を工夫し、創造力・鑑賞力を高める教育普及活動を展開する。 ■アーティストによるワークショップや新たな情報デバイスの活用など、様々な体験をとおして、現代美術の普及に取り組む。 ■学校との連携や高齢者対象、障害があっても参加することができるプログラムなど、様々な年齢や興味に応じたきめ細やかな事業を展開する。	■5月に新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを受け、秋以降は団体鑑賞受け入れや講座、ワークショップ参加者が増加、昨年度を大きく上回る実績があった。 ■現代作家によるワークショップや学校訪問、手話通訳やワイヤレス補聴援助システムを活用した企画展関連トーク等を通じ、多様な参加者に対して創造力・観察力の可能性を拡大する事業ができた。
	評価指標　教育普及プログラムの参加者数及び満足度	教育普及プログラム参加者 7,944名　満足度92%
6	■才能ある芸術家の発掘・支援のため、新しい創造活動や作品発表の機会提供や作品の収蔵などを行う。 ■学校をはじめ、国内外機関、地域企業やNPOなど様々な人々とのネットワークを形成し、文化の担い手の裾野を広げる。	■コレクション展においては、百瀬文、潘逸舟、ワタリドリ計画（麻生知子、武内明子）等、近年に新規収蔵した若手作家の作品の紹介等を積極的に行った。 ■企画展においては、MOTアニュアル展等若手作家の創作発表の場を創出した。 ■「アーティストの一日学校訪問」等の事業を通じて、将来的な文化・芸術の担い手の裾野を拡げ、多角的な視野へと導く事業を展開した。
	評価指標　若手作家への支援数（作品公開・展示・収集等）、インターン受入れ	若手作家への支援　作品公開78点／展覧会における作家13名（9+4）／収集6名・25点
7	■設備面のみならず、手話通訳の導入や普及プログラムの提供などソフト面でのバリアフリーを促進する。 ■総合的な視点から、多言語化を含め、誰もが現代美術を享受できる場を作る。 ■おむつ替えスペースの設置やベビーカーの無料貸出等、小さなお子様連れでも安心して美術館での鑑賞を楽しむことができる環境を整える。 ■スマートフォンやタブレット端末を用いて、インターネット経由での展覧会の鑑賞の他、より現代美術に親しみやすい環境を整える。	■手話トークの実施や触察マップの制作等、幅広い来館者層が享受できる現代美術の場を創出できた。 ■館内の飲食スペース、休憩スペースの飽和状態を鑑み、サービス向上の一環としてキッチンカーの設置、休憩スペースを設けた ■展覧会出品作家インタヴューをウェブ公開する等、企画理解促進と図った。
	評価指標　バリアフリーに関する取り組みの件数、アンケート、満足度調査による満足度、未就学児の割合	・手話通訳導入　8回・手話研修の実施　4回・ロジャー導入　2回・触察用フロアマップの閲覧・配布・障害のある子どもとその保護者を対象としたワークショップの実施
8	■近隣施設や商店街等と連携し、地域における街づくりの核となることで、伝統と現代が共存・融合する都市・東京のイメージをアピールする。 ■地域との密なコミュニケーションを図り、誰もが文化に触れられ、参加できる親しみやすい施設づくりを目指す。 ■地域と連携した事業を積極的に実施し、地域経済の活性化と観光拠点としての役割を果たす。	■東京アートブックフェアでは北欧映画祭、清里現代美術館アーカイヴプロジェクトなど、多彩な関連事業を開催し、アートブックの現在を体験できる場を創出した。 ■区民まつりや町内清掃への参加、イベントへの協力など地元区、町会、商店街等と積極的に連携した。館と地域が連携を深めることで、伝統と現代が同居する清澄白河地域の発展に寄与している。
	評価指標　地域連携活動の実践	【江東区】① 江東区民まつりへの参加、②スタンプラリーへの協力、【地元町会（三好4丁目）】③ 毎月一斉清掃への参加、④ イベントへの協力、【地元商店街】かかしコンクールへの協力、【東京ｱｰﾄﾌﾞｯｸﾌｪｱでの地域連携】「NEIGHBOURS（ネイバーズ）」エリアマップ作成、映画祭の地元開催（菊川）

総合的な所見（自己評価の総評）

コレクション展では、各期ごとにテーマを設定し特色ある展覧会を開催した。近年の新規収蔵作品を積極的に紹介するとともに、企画展との相乗効果や補完性にも配慮するなど、年間を通じバランスのよい構成とし、コレクションの重要性と魅力を幅広い来場者に示すことができた。
企画展では、話題性に富む大型のファッション展、海外巨匠作家の大回顧展、社会課題やアクセシビリティへ向き合う展覧会、若手作家のグループ展、中堅作家の再評価につながる初の大規模個展など、館のキュレーションの力が十分に発揮された、幅広く内容の充実した展示のクオリティは高い評価を得た。
もともと現代美術館は、他の都立美術館と比較してコロナの影響は相対的に低く止めることができ、コロナの影響からの回復も早かった。観覧者数は、ディオール展、ホックニー展という集客力の高い展覧会を展開できたこともあり、コレクション展は年間16万人を超えて過去最高、企画展も50万人を超えて歴代2位となり、令和5年度は定量的にも定性的にも非常に充実した年となった。
展覧会とともに館の活動の一翼を担う教育普及事業は、コロナが落ち着いてからは、展示室での対話を介した鑑賞活動が増え幅広く様々なプログラムを実施した。今年度はコレクション展で実施してきたギャラリートークの企画展での実施も試みた。手話通訳や補聴援助システムを導入した回も設けた。特に本事業では、触察ツールの開発や院内学級の子供たちへ対するオンライン授業を行うなど、あらゆる鑑賞者に開かれた美術館を目指した取り組みを積極的に進めている。美術館全体としても、デフリンピックに向け、アクセシビリティの向上を目指す東京都の方針とも平仄を合わせ、引き続きこうした対応を強化していく。
その他、コレクション展の観覧料を全中学生を対象に無料としているほか、館独自の学生無料デーの実施、SNS発信強化など、若い鑑賞者の育成にも力を入れている。また、地元のイベントや清掃活動等に積極的に取り組むなど館と地域との連携を深め、清澄白河という街の発展に寄与している。賛否の反響が大きかったイベントについては館としてのステートメントを発表するなど説明責任を果たし、美術関係者から評価された。

外部評価 評定結果

A：目標を十分に達成し、成果を上げている

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

○コロナ禍がようやく収束したが、現代美術館においてはそれ以前に戻ったのではなく、入場者数だけをみても大きく増加している。企画展やコレクション展の開催とその関連事業の実施、幅広い教育普及事業や広報活動、図書室の運営、またレストランやカフェをはじめとする来館者サービスや施設の管理など、美術館活動運営全般にわたって十分な成果をあげた。
○現代美術館ならではの内容と発信力を持つ企画展とコレクション展では、全ての展覧会で目標人数を達成し、アクセスビリティの向上への取組を積極的に推進するなど、定性的にも定量的にも大いに評価することができる一年であった。
○ビッグネームであるディオール展やホックニー展の成功で、これまで美術館に関心の低かった層の興味を掻き立てるとともに、中堅、若手作家にも大きな展示の機会を与えることと合わせ、作家と鑑賞者を育成するという、美術館として極めて重要な役割を果たしている。
○この数年間に起こったさまざまな出来事により、日本の美術館の事業運営も大きく変化し、加えて80年代後半から開館した各地の美術館の学芸員が定年を迎え、世代交代が大きな変化をもたらしている。大きな変革の時期を迎えている美術館界において、ほぼ独走に近い形で成果を上げているのが、東京都現代美術館といえる。現代美術が受け入れられるようになり生活にも浸透しつつあることを実感する
○現代美術という特性から、どうしても論争や議論、そして美術館に対する批判や叱咤激励が生まれてしまうが、これはネット社会の特徴として受け止めて、議論を避けるのではなく、美術館もきちんと議論に参加できるよう対応してほしい。現代美術館はそれができていると評価している。
○働き方改革として社会も変化してきており、労働者への支援が強く求められてきている。特に学芸員の労働環境がさまざまな美術館やアートプロジェクトでも問題になっており、今まで以上の体制を確保する時期に来ているのではないか。

【東京都美術館】

令和5年度目標達成シート

資料３－５

基本方針

東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。

新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人々の「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。

来る開館100周年（2026年）を機に、芸術文化による社会包摂と心身の健康と幸福を目指し、新しい美術館モデルを切り拓いていきます。

そのため、美術館の運営にあたって4つの役割を掲げます。

1 「世界と日本の名品に出会える美術館」
2 「伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館」
3 「人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館」
4 「芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館」

この基本方針のもとに4つの事業を展開します。

① 展覧会事業＝特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する。
② 公募展事業＝公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する。
③ アート・コミュニケーション事業＝アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する。
④ アメニティ事業＝アートラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる。

	R2年度実績値	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度基準値	R5年度参考目標値	R5年度実績値
特別展観覧者数（人）	136,913	573,731	643,683	〈850,000〉	550,000	921,379
自主企画展観覧者数（人）	9,003	34,286	88,761		40,480	60,378
公募展示室割当時稼働率	100	97.8	98.2	〈100.0〉	－	96.5

※R5年度基準値は、提案書の基準値
※R5年度参考目標値は、当該年度特有の事情を考慮した数値

令和5年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

1

「アートへの入口」として「創造と共生の場」を形成する。
令和5年度は、引き続き感染症予防対策を万全にしつつ社会情勢に柔軟に対応し、グローバルかつ計画的視点を持って事業を確実に実施していく。館活動全体で多言語対応、ダイバーシティ対応などホスピタリティの向上に努めるとともに多角的な広報運営を推進する。また、来館者の安全安心を最優先に施設管理を行いつつ、訪れる楽しさを充実させる「アメニティ事業」を展開する。さらに、アート・コミュニケーション事業を中心に、ICTを活用した事業や連携、交流に努めるとともに、子供、青少年、高齢者、障害者、外国人等が主体的に美術館活動に参加できる活動の場を拡張し、ミッションの実現に向けた取組みを推進する。また、「東京都文化戦略2030」と連動した指定管理事業計画の一部見直しも着実に進める。

評価指標：最先端技術を活用した発信…「ICTを活用した国内外の文化施設、機関との連携と交流（オールジャパン戦略事業）」（交流プログラム実施回数）
間口を広げ、主体的に関わる仕組みづくりの見える化を進める…公募展示棟LBロ3ロビー階第3公募展示室で夏季期間にACアート・コミュニケーション事業を一般に分かりやすく紹介し、多様な人々が参加できるサテライト展示を行う。（ワークショップ実施回数）

令和5年度は、5月8日からコロナが5類へと移行し、原則的にインフルエンザと変わらない扱いになった。しかし、特別展では良好な鑑賞環境保持のために土日祝日及び会期終盤の平日は日時指定制を堅持して、安全第一に美術館の運営を行った。広報では、適切な情報の提供に努めるとともに、現場では毎日来館者に各持場で丁寧に対応した。アート・コミュニケーション事業では、「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative aging ずっとび」で、引続き活発な活動を続けると共に、夏季期間に公募展示棟LB第３公募展示室でAC事業を一般に分かりやすく紹介した。アメニティ事業では、ショップ、美術情報室、レストラン等で日々更なるホスピタリティの向上に努めた。「東京都文化戦略2030」と連動した指定管理事業計画の中間見直しを、財団各館と連携しながら適切に実施した。

2

「世界と日本の名品に出会える美術館である」
特別展では、前年度より引き続き「レオポルド美術館　エゴン・シーレ展 ウィーンが生んだ若き天才」を、「マティス展」を春から夏にかけて開催し、日本では約20年ぶりとなる大回顧展をパリのポンピドゥー・センターの所蔵品を中心にして開催する。「永遠の都ローマ展」では、カピトリーノ美術館の名品を中心に、ローマ2000年の歴史を彫刻・絵画など美術品を通して紹介する。そして「印象派　モネからアメリカへ　ウスター美術館所蔵」では、アメリカ、ウスター美術館の所蔵品により、印象派の明るい色彩による表現がどのようにアメリカや世界の国々で広く展開していったのかを辿っていく。感染症予防対策を万全にした上で、より良い鑑賞環境の下で世界的名作を味わっていただく。また次年度以降の展覧会の準備を着実に進める。

評価指標：年間特別展観覧者数（人）

特別展「マティス展」では、ポンピドゥー・センターの所蔵品を中心にマティスの多岐にわたる芸術的実践の魅力を伝えた。「永遠の都ローマ」展では、カピトリーノ美術館の所蔵品を中心に、「永遠の都」と称されるローマニ千年の歴史と芸術を紹介した。「印象派　モネからアメリカへ　ウスター美術館所蔵」展では、印象派の世界的受容と展開を分かりやすく紹介。出品作品のほとんどが日本初公開で、アメリカにおける印象派の知られざる魅力を堪能できる貴重な機会となった。日時指定制に関しては、引き続き、土日祝、会期終盤の平日に適用、大きな混乱なく運営することができた。令和5年度年間特別展観覧者数実績は921,379人であった。

3

「新たな価値や可能性を見出す展覧会等を実現する」
企画展では、版画、立体、インスタレーションなどの制作を続けてきた「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展」を開催する。「家」「椅子」「舟」といったモチーフにより、鑑賞者に様々な連想を可能にする幅の広い表現に定評がある女性作家である。事前にワークショップを開催して、参加者の作品も取り入れた新作も予定している。「コレクション展　動物園にて ―東京都コレクションを中心に」では、「動物園」をテーマにして、他の財団所管施設と連携して東京都コレクションを積極的に活用し紹介する。

評価指標：企画展とコレクション展の入場者数（人）

「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈 展」では、これまでの現代作家展で最高の動員を記録することができた。鑑賞者に様々な連想を可能にする幅の広い表現（鑑賞）への入口となるよう、会期中、会場に案内スタッフを常駐させるなど、担当ならではの工夫を試みた。「コレクション展　動物園にて ―東京都コレクションを中心に」では、「動物園」をテーマにして、他の財団所管施設と連携して東京都コレクションを積極的に活用し、高い評価を得た。コレクション展の入場者数24,488人と、企画展38,562人、上野アーティストプロジェクト2023の21,816人とあわせると84,866人の入場者数を記録した。

本年度、2021年度の企画展「Walls & Bridges 世界にふれる、世界を生きる」が第7回日本展示学会賞を受賞した。

4

「作品発表の場の提供と新たな創造性を共有する美術館である」
公募展事業では、学校教育展、公募団体展を滞りなく安全に実施する。また、令和7年度の単年度使用割当を円滑に決定する。公募展活性化事業では、「上野アーティストプロジェクト」、「都美セレクショングループ展」を着実に実施するとともに、次年度以降の実施に向けた準備もしっかりと進める。

評価指標：公募展示室使用割当時稼働率（%）

公募展事業の令和7年度の単年度使用割当は96.5%の割当となった。令和5年度開催の学校教育展・公募団体展は各主催団体に協力を要請しながら安全に実施した。
「都美セレクション グループ展2023」では、現代美術の動向を反映する3つの企画を実施した。
「上野アーティストプロジェクト2023いのちをうつす ―菌類、植物、動物、人間」では、特定の生物を真摯に見つめ観察して制作し続けてきた6人の作家の作品を通し公募展にかかわる作家の魅力を効果的に伝えるとともに、鑑賞者との新たな出会いの場となった。展示においては、視覚障碍者向けに手で触れて鑑賞できるタッチカービングや一部作品の触察ツールを制作展示した。出品作家とゲストによるトークイベントでは6回のすべての実施回にて手話通訳と文字支援情報を配備しアクセシビリティへの工夫も行った。その他、ダンス・ウェルも開催するなど、身体にさまざまに不自由さを持つ方の参加を促す工夫も行い、高い満足度を得た。

5

「アートを介して多様なコミュニティの形成を行い、社会課題の解決に取組む」
アート・コミュニケーション事業では「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」そして教育普及活動を着実に実施するとともに、令和3年度に開始した「Creative Ageing　ずっとび」を事業計画に沿って確実に推進する。「ずっとび」では高齢者や障害者と文化施設をつなぐ仕組みづくりに向けて調査・研究を行い、プロトタイプとなるプログラムを実施する。ICTを活用して国内外の連携機関と勉強会を開催し、社会課題に対応する先端的な事例の共有などを行う。

評価指標：「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー」に取り組む…「高齢者とその家族を対象にしたプログラムのプロトタイプ開発」、「初期の認知症高齢者を対象にした鑑賞プログラムの開催」（プログラム実施回数）

「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative Ageing ずっとび」で、引続き活発な活動を続けた。また、「オールジャパン戦略事業」ではアートを介してコミュニティを育む事業を推進する全国8つの拠点をつなぎ勉強会を進め、各地の実践をお互いに紹介するオンラインレクチャーを実施。「Creative Ageing ずっとび」では、台東区の医療・福祉機関と連携し、認知症の高齢者とその家族とアート・コミュニケータとが東京藝大美術館で対話型鑑賞をするプログラムを実施した。

6

「様々な主体とのネットワークを強化しながら上野地域の文化施設の中で中核的な役割を果たす。」
上野周辺地域の文化および商業施設とのネットワークを強化することにより、地域の魅力を高めることを目指す。顕在化していない地域の様々な文化資源も含め、横断的にそれらをつなぐアート・コミュニケーション事業の実施や、地域連携による着実で積極的な広報活動を行う。

評価指標：上野周辺地域の文化および商業施設との連携

「Museum Start あいうえの」による上野公園の文化施設の連携を継続しながら、広報においても引き続き上野の商業施設との連携広報の取組みを積極的に行った。とくに「印象派　モネからアメリカへ」展では鉄道や上野地区での広報を積極的に展開して話題を呼び、目標を大きく超える入場者を獲得している。今年度はほぼ全面的に状況がコロナ以前に回復し、上野公園を訪れるインバウンドの数も目に見えて増えている。

総合的な所見（自己評価の総評）

令和5年度も安全第一に美術館の運営を行った。広報では、適切な情報の提供に努めるとともに、現場では毎日来館者に各持場で丁寧に対応した。アート・コミュニケーション事業では、「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative aging ずっとび」で、引続き活発な活動を続けると共に、夏季期間に公募展示室でアート・コミュニケーション事業を一般に分かりやすく紹介した。アメニティ事業では、ショップ、美術情報室、レストラン等で日々更なるホスピタリティの向上に努めた。特別展「マティス展」では、ポンピドゥー・センターの全面的な協力のもと、マティスの多岐にわたる芸術的実践の魅力をわかりやすく伝えた。「永遠の都ローマ」展では、カピトリーノ美術館の所蔵品を中心に、「永遠の都」と称される世界遺産ローマ2000年の歴史と芸術を、約70点の作品により紹介した。「印象派　モネからアメリカへ」展では、印象派の世界的受容と展開を日本の外光派などの紹介も加えて分かりやすく紹介した。企画展「うえののそこから「はじまり、はじまり」荒木珠奈展」では、これまでの版画や参加体験型のインスタレーション等をバランスよく展示した。上野の歴史をテーマにした大型の新作インスタレーション《記憶の底》は地域の話題を呼んだ。「コレクション展　動物園にて」では、日本の動物園の歴史を、写真、絵画、資料、書籍、映像などでたどる展示にした。いずれも、目標以上の入場者数 と満足度を達成した。公募展事業では、令和7年度の単年度使用割当を決定し、96.5%の割当となった。「上野アーティストプロジェクト2023　いのちをうつす」では、特定の生物を真摯に見つめ観察して制作し続けてきた作家6人を紹介し、公募展にかかわる作家たちの知られざる魅力を紹介し、また、展示ではタッチカービングや触察ツールを配したり、関連事業ではダンス・ウェルの実施の他、トークイベントにて文字通訳を配備しアクセシビリティへの工夫も行った。「都美セレクション グループ展2023」では、絵画、写真、映像など現代美術の動向を反映する3つの企画を実施した。アート・コミュニケーション事業では、本年度も「とびらプロジェクト」「Museum Start あいうえの」「Creative aging ずっとび」で、引続き活発な活動を続けた。また、「オールジャパン戦略事業」ではアートを介してコミュニティを育む事業を推進する全国8つの拠点をつなぎ勉強会を進め、各地の実践をお互いに紹介するオンラインレクチャーを実施した。「Creative Ageing　ずっとび」では、認知症の高齢者とその家族とアート・コミュニケータとが東京芸術大学美術館展示室で作品を一緒に鑑賞するプログラムを台東区の医療・福祉機関そして大学美術館と連携して、対話型鑑賞を行うプログラムを実施した。既述のとおり公募展示室で、これまでのアート・コミュニケーション事業を一般に分かりやすく紹介するとともに、企画展「荒木珠奈展」と連動させて、ワークショップやレクチャーなど様々なプログラムを実施した。上野公園の文化施設の連携を継続しながら、広報においても引続き上野の商業施設との連携広報の取組みを積極的に行った。とくに「印象派　モネからアメリカへ」展では鉄道や上野地区での広報を積極的に展開して話題を呼び、目標を大きく超える入場者を獲得している。今年度は上野公園を訪れるインバウンドの数も目に見えて増え、ほぼ全面的にコロナ以前に状況が回復している。令和6年度においても、ますます変動する社会情勢に柔軟に対応しつつ、東京都の「新文化戦略2030」と財団の「改訂長期ビジョン」等を参照し、関係各機関と密接に情報を共有しながら、2026年の開館100周年を見据えて、適切に事業を実施していく。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

どの展覧会も入場者目標を上回り、特にマティス展はコロナからの回復を確信させる入場者実績であった。社会状況の変化に柔軟に対応し、向上心を持って努力を継続した職員の成果と考える。
単に入館者数が多いのみならず、展示やカタログにおいても工夫が見られ、幅広い層が楽しめるきわめて高いレベルの展覧会であった。企画展「荒木珠奈」展は通常とは異なる展示構成が印象的であった。「コレクション展　動物園にて」や「上野アーティストプロジェクト2023　いのちをうつす」はキュレーションの妙が光る展覧会であり、どちらも企画の目的を十分に達成している。
都美は2026年、開館100周年を機に、新しい美術館モデル「芸術文化による社会包摂と心身の健康幸福」を目指している。
荒木珠奈展での展覧会ファシリテータの活躍と多様な参加型プログラム、上野アーティストプロジェクトでの触察図やタッチカービング、基本的来館者対応でのアクセシビリティ配慮、ずっとびプロジェクトでの高齢者や認知症への積極的な関与は、この目標に近づく都美ならではの実績と高く評価したい。運営に関しても適切になされており、総じて高く評価したい。
この年度の本館の活動は、本館創出のアート・コミュニケーション事業と問題意識を鮮明にした企画展事業という二つの大きな事業が、深くリンクしながら進む新しい美術館の在り方を創出しながら近づいてくる100周年を迎えようとしていると言えよう。

【東京都庭園美術館】

令和5年度目標達成シート

資料３－６

基本方針

1　歴史的建造物である本館の保存とその公開

2　装飾芸術に基づく新たな価値を今日の社会に活かす展覧会・各種事業の実施

3 「歴史的建造物」、「装飾芸術」、「庭園」を三本柱とする文化的都市空間の形成

4　あらゆる鑑賞者に開かれた美術館の実現

東京都庭園美術館は、本館が昭和8年（1933）に建築されたアール・デコ様式の歴史的建造物であることから、昭和58（1983）年の設立以来、その「保存」と「活用」を運営方針としてきました。

保存の面では、開館を期に本館の修復作業に着手し、また毎年、アール・デコ様式の調査研究を兼ねた「建物公開展」を開催してきました。その成果のひとつとして、本館は平成27年（2015）に、国の重要文化財「旧朝香宮邸」に指定されています。

活用の面では、アール・デコという言葉が、「装飾芸術」（建築、デザイン、工芸、家具、美術等に表れる装飾性）を意味するフランス語に由来することから、これまで国内外の美術作品を、主として装飾芸術の観点から取り上げる展覧会を企画してきました。

平成２６（2014）年の新館改築を機に、館の運営方針には、「新たな価値の創造」が加えられました。これによって庭園美術館の展覧会事業には、今日の視点で装飾芸術を創造する芸術家の作品を展示することが加わりました。

このほかに東京の文化の魅力の創造と発信に寄与するために、装飾芸術の価値を今日の社会に生かすという視点から、庭園の活用事業をはじめとして、さまざまな教育普及事業にも取り組んでいきます。

以上の経緯により、庭園美術館は、重要文化財である「旧朝香宮邸」の保存と公開を基盤に、装飾芸術の力によって、東京という都市のこれからの課題である多文化共生、環境問題などに対応し、すべての都民の心を豊かにする場となることを目指していきます。

	R2年度実績値	R3年度実績値	R4年度実績値	R5年度基準値	R5年度目標値	R5年度実績値
観覧者数（人）	100,473	123,886	151,537	＜185,000＞	132,000	166,194
庭園のみ入場者数（人）	49,401	39,110	64,104		61,400	70,542
自主事業参加者数（人）	806	1,009	3,389			8,217

※R5年度基準値は、提案書の基準値
※R5年度目標値は、当該年度特有の事情を考慮した数値

令和5年度達成目標 ／ 成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）

		令和5年度達成目標	成果と課題（評価指標の結果も含めた成果、分析、評価、課題、対応）
1		旧朝香宮邸の適正な維持管理及び調査研究 ・重要文化財に指定されている旧朝香宮邸本館・茶室を、緑あふれる庭園とともに適切に維持管理しつつ、歴史的沿革や建築史・美術史的特徴などに関する調査研究を通してその価値を高めていきます。	重要文化財である旧朝香宮邸本館を適正に維持管理し、良好な状態を保ちつつ公開に努めた。茶室・庭園に関しても、本館同様文化財としての視点から適正な維持管理に努め、必要に応じて関係諸機関等と協議しつつ修復や樹木の剪定等を実施した。また、当館の沿革や特徴を広く紹介するため、アール・デコ期のデザイン画やガラス工芸作品、朝香宮家旧蔵資料をそれぞれ購入により収集し、コレクションの充実に努めた。また、収蔵品情報の公開に向けたデータベース整備作業にも注力した。
	評価指標	当館の収蔵品情報を、ICT技術を活用してデータベース化し公開	新規収蔵作品・資料数9件、収蔵品検索システム（ToMuCo）上での情報公開スタート
2		建物公開展の実施を通じた重要文化財「旧朝香宮邸」の価値の発信 ・旧朝香宮邸に関する調査研究の成果を反映した「建物公開展」を開催し、都民共有の貴重な文化遺産に親しみつつ後世に継承するための契機とします。	令和5年度建物公開展（受託事業）として「建物公開2023 邸宅の記憶」展を開催し、本館建築への関心を、かつて朝香宮家の人々が実際に生活を営んだ場としての観点から喚起した。現在は美術館として活用されている建物が、実際に生活空間として使われていた当時の姿が実感できたと高評価を得た。
	評価指標	建物公開展入館者数、満足度	入場者数44,295人（一日平均791人）、満足度97.2%
3		装飾美術の観点から内容を選定した企画展覧会を開催し、優れた作品等の鑑賞機会を提供 ・アール・デコ様式の原点である「装飾美術」の観点から、幅広いジャンルの多様な表現を採り上げ紹介します。また、講演会やオンラインツアー等を通じて情報の発信に努めます。・当館の空間特性を活かし、先端的表現や新たな展示手法の導入を通じて国内外の装飾芸術を魅力的なかたちで紹介します。	令和5年度企画展として「フィンランド・グラスアート」展、「装飾の庭」展、「旧朝香宮邸を読み解くA to Z」展を開催した。40年間に渡る調査研究の成果を発揮した独自性の高い企画に加え、当館の環境特性を活かし、外光を積極的に採り入れた展示空間構成や、キーワードを軸に建物の来歴や特徴にフォーカスした斬新な情報提示方法の採用により、世代を超えて高い支持を得ることができた。
	評価指標	講演会やオンラインツアーなど関連事業の開催	講演会等4回、ワークショップ1回、こどものための教材配付2種、動画オンライン配信2種
4		建物や庭園などの文化資源を活用した教育普及等の事業の実施 ・本館に施された装飾をテーマとしたワークショップや、庭園・茶室を活用した各種イベント等の開催を通じ、文化財の価値や意義を楽しく理解できるよう工夫します。	茶室「光華」を活用した季節毎の茶会を実施したほか、親子を対象とした「こども茶会」や、茶室の建築に焦点を当て、専門家を講師に招聘してのトークイベントを開催した。また、昨年度に引き続き美術館講座を4回実施し、さまざまな観点から当館の魅力や特性について学ぶ機会を提供した。
	評価指標	建物や展覧会鑑賞用の独自のガイドブックを活用した学校連携の実施。参加したクラス数	スクールプログラム13校、美術館講座4回、こども茶会1回、茶室トークイベント1回実施
5		ユニークな空間特性を生かし、豊かな文化的体験の場を提供 ・庭園や茶室を有する当館のユニークな環境特性を活かし、伝統文化を学ぶ若年層と在住外国人の日本理解の取組等を繋ぐイベントを開催し、多様な文化的価値を体感できる場を創出します。	地域連携と文化交流を目的に、茶室を活用した「光華倶楽部」を実施した。港区内に所在する大使館と高校にそれぞれ働きかけ、両者が当館の茶室を会場に、茶会を通じて相互理解と交流を図る場を提供した。高校生による大使館職員への呈茶と、返礼としての高校生の大使館訪問というユニークな構成で、令和5年度は計4回実施した。マッチングに漏れた高校を対象とした高校生茶会も試行的に実施し、好評を博した。
	評価指標	庭園や茶室を活用した若年層向けイベントの開催	光華倶楽部4回、高校生茶会2日間計11校参加
6		庭園を活用した地域連携事業の実施 ・近隣他施設や組織と連携し、庭園を活用した魅力的な事業を開催します。	庭園活用と地域連携を兼ねた試みとして、当館の自主事業のかたちで「庭園能」を実施した。11月末という寒冷期での屋外イベントにもかかわらず、2日間計3公演は全て入場チケットが完売し、来場者からも継続を望む声が多数寄せられた。実施に際しては自主財源に加えて新たな協賛先を確保し、予算上の課題をクリアすることができた。
	評価指標	芝庭を会場とする伝統芸能公演の実施	庭園能2日間計3公演実施
7		共生社会を指向する事業と施設管理 ・共生社会の課題に対して美術の力で貢献できるよう、アクセスをためらいがちな障害のある方、子育て世代を対象とした各種プログラムを継続するとともに、一部を一般来館者の参加の下で行い、社会包摂の取組を拡充します。	これまで休館日を利用して行っていたアクセシビリティプログラムを、各展覧会ごとに2日間、平日（水曜日）を「フラットデー」と名付け、全体の入館者数を抑制しながら実施した。誰でもが気兼ねなく美術館にアクセスでき、共生する環境を目指した試みとして、利用者から一定の評価を得るとともに、先進的な取り組みとして注目度も高く、各方面より視察等の受け入れを行った。また、令和5年度も引き続き「やさしい日本語プログラム」を実施した。
	評価指標	アクセシビリティプログラム及びダイバーシティプログラムの実施	「フラットデー」7日間、ベビーデー1日、「やさしい日本語プログラム」1回実施
8		様々な媒体を通し、美術館活動を国内外に発信 ・世界的に活躍する建築家を館長に迎えたことを機に、ミュージアムショップと情報発信機能を融合させた拠点を整備し、現代アーティストと装飾美術とのコラボレーションによるユニークな活動を展開し、広く国内外に発信します。 ・1983年の開館以来現在まで培ってきた当館のブランドイメージを大切にしつつ、来たる開館50周年に向け、「いまとこれから」の観点から新しい美術館のイメージを発信していく開館40周年を記念した各種事業を展開します。	開館40周年を記念し、年間を通して各種記念事業を実施した。開館記念日（10/1）の展覧会無料公開や「TEIEN 40th Anniversary festival」等の多彩なイベントの開催に加え、駅看板やデジタルサイネージ及び特設サイトやYou tube等のメディア・ミックスによる時宜を得た情報発信を通じて、庭園美術館の新たなイメージづくりに大きく貢献することができた。また、公式ウェブサイトのリニューアルを実施し、当館らしい装飾性を活かしたデザインとするとともに、アクセシビリティの向上を図った。
	評価指標	発信拠点におけるテーマ展示の実施、特設サイトの立ち上げと情報発信、HPリニューアルほか	多彩な40周年記念事業の実施、特設サイト、SNSによる発信、公式ウェブの全面リニューアル

総合的な所見（自己評価の総評）

開館40周年の節目となった令和5年度は、各担当者がそれぞれに創意工夫を凝らし、企画内容・展示構成ともに当館らしさを存分に発揮した良質な展覧会を全てにおいて提供することができた。来館者の満足度も極めて高く、アンケート等において肯定的な意見を多数賜ることができた。また「フラットデー」に代表されるアクセシビリティプログラムや、「光華倶楽部」「庭園能」のような地域連携と文化交流にも注力し、新たな魅力の創出に努めた。管理運営面でも堅実な予算執行と安全安心な施設環境の維持に努め、オペレーションミスによるクレームの発生を未然に防いだ。さらに、開館記念日である10月1日を中心にさまざまな記念事業を展開したが、内容の検討に当たっては館内でプロジェクトチームを組織し、職員が係や担当職務の域を超えて、一体となって開館40周年を主体的に盛り上げるべくアイデアを出し合った。その成果は「わたしのいい日に」というキャッチフレーズに象徴されるように、当館があらゆる人々にとって思い出に残る、かけがえのない場所であって欲しいという思いとともに結実し、40周年に相応しい、多くの人々の記憶に残る事業展開を実現することができたと確信している。

外部評価 評定結果

A

A：目標を十分に達成し、成果を上げている
B：目標を概ね達成している
C：目標を十分に達成しておらず、改善が必要である

総括的な意見（総評）

40周年を飾るにふさわしい充実した展覧会や普及事業の数々が展開された。自己評価コメントにも記されている通り、館長、副館長以下スタッフ全員で積極的に盛り上げたとわかる質と量であり、調査研究などこれまでの専門的な活動と祝祭イベントとが相乗効果をもたらしたと思う。旧邸宅ならではの非日常感と親しみやすさをうまく使い分けながらその価値と魅力を伝える手法のひとつの到達点か。これ以上に事業を拡大していくことがいいのか。スクラップ・アンド・ビルドも必要なのではないか。40周年を起点として、今後どのように活動していくのか引き続き注目したい。